



暮らし



学徒動員で働いた日々
木下 正義

叔父は1枚の紙になって帰ってきた
竹田 靖子

焼け残った椅子を使い、焼け跡で行った無料理髪
根岸 幸三郎

巣鴨プリズンで東条英機が最後に望んだ“サンマ”の塩焼
広瀬 儀光

学徒動員で働いた日々

祖父が始めた魚屋を引き継ぎ、戦争中も商売を守ったのち、やがて居酒屋「魚竹」を開いて地域の人々に親しまれてきた木下正義さん（85歳）。夫婦で経営していた店も平成23（2011）年に閉め、代々暮らしてきた地で現在も暮らしています。

石川島造船所越中島工場部品作りに従事

木下さんは、お住まいの場所で代々魚屋を営んでいたそうですね。

祖父が明治30（1897）年頃に富山県から出てきて。最初はこの近く、多町大通りに出るところにあったヤツチャバ（青果市場）のそばで茶屋をやっていたみたいです。ヤツチャバは関東大震災後に秋葉原に移り、26年前には大田区に移りましたが、市場のまわりには何軒か、仕入れに来る人たち向けの茶屋があったんですね。秋葉原移転後は自宅の場所で小売りの魚屋を始めました。棒手をかっいで売り歩くところから始めて、店を持ち、戦争中は、その魚屋をおやじが継いでいました。

戦争の時は学校に通っていたのですか。旧制中学校に行っていました。永代橋の中央

商業学校です。でも戦争中に商業なんかやっていた場合ではないと、途中で工業になったんですよ。だから僕は工業も少し勉強しましたよ。そこで学徒動員です。中央商業だけではなく全部の中学校が動員させたのではないかな。文部省の指示で。

どこでどんな作業をしたのですか。

佃島の石川島造船所越中島工場です。小川町から都電で門前仲町に出て、そこから徒歩で工場へ行きました。そこでは「ネ20」と書かれた軍事物を作っていました。パーツだから、それが何なのか分かりません。皆は秘密兵器と言っていましたね。ジェットエンジンの部品だったと知ったのは最近のことです。

仕事は大人の工員と一緒にです。平らな鉄板に加工箇所印になる線を引き、ボール盤を使って切ったり穴を開けたりして部品の形を整えて



きのした まさよし
木下 正義

神田司町

インタビュアー

松野和寛（区内在勤者）
谷垣柚乃（高校2年生）
大須賀 龍（高校1年生）

いく、そういう仕事です。工場長や組長が教えてくれたし、難しいことはありません。日本のボール盤は音がうるさいんですが、ドイツ製だったかが1台あって、それは静かで、サーツと動いていました。

昼の食事は給食でした。おかずは靴のひもと呼んでいたもの、あれはゼンマイだったのかな、そればかりでした。あとは大豆も出ていましたね。

——辛^{辛い}かったことや楽しかったことはありますか。

工員に比べ、学生の仕事量はちよつと少なかったと思います。だから特に辛いことはありません。鉄で作った3人くらい入れるお風呂もあって、「学生さん、帰る前に入っていきな」とお湯を入れてくれたり。僕は入りませんでしたけれど。僕らは中学生でしたが、拓殖大学の学生も動員されて来ていました。

初期の空襲には怖さはなかった

——慰^{いもん}問もありましたか。

灰田勝彦、ディック・ミネとか来ましたね。ディック・ミネは、名前が英語だといかんと、芸名を三根耕一にしてみました。最初は戦争行進曲とかナントカ攻撃隊とか歌うんですが、みんなが本当に聞きたいのは、灰田勝彦の甘い声。お兄さんの灰田晴彦がスチールギターを弾いているハワイアングループでね。勇ましい曲をやると帰っちゃう人もいました。



昭和19年8月17日に撮影した木下家の家族写真

——その頃、ご自宅のあたりでは、空襲はどのような状況でしたか。

はじめのうちは空襲と言っても1機くらいなんです。偵察なんです。富士山を目印に来る。本当に高いところに1機だけでした。それからだんだん編隊で来るようになりました。3月10日の大空襲は大変なものでした。深川や両国の方がやられました。友達もいっぱいいたんですが、翌日に来ないから、ああ亡くなったんだな、と分かるんです。

隅田川では川の中に逃げたのか、水死体もけっこう流れていましたね。焼死体もたくさん見ました。最初はびっくりしましたよ。でも、慣れちゃうんだね。だんだん怖くなくなっていくんです。夏になれば暑いし、その頃は僕らも隅田川で泳ぎました。平気でしたね。空中戦もよく見ました。B29を攻撃する戦闘機ですね。残念ながらやられた場合もあるし、日本のパラシュートが開かないで落ちちゃうこともあった。そういうのを見るとがっかりしていましたね。夜にB29が来た時は、探照灯というので照らして撃つんです。これがけっこう当たりました。ロケットのようにバババツと火を噴いて、弾がB29に当たっても、落っこちない。そのまま進み、東京湾の方に逃げていく。なにか味方がいて、助けるような仕組みがあったんじゃないでしょうか。

——空襲で命の危険を感じることはありませんか。

怖さはあまりなかったですね。敵機が何時頃来るかは分かるんです。ラジオで「敵機来襲」って言う放送を聞き、「敵機、また来るよ。3時頃だつてさ」って話すくらい。こっちに来るか関西に行くかも放送していたし。余裕と云うのもおかしいですが、そういう会話が飛び交っていました。

B29の大きさを見せるため、日比谷公園で展示していました。見に行きましたよ。大きいね、やっぱり。日本の戦闘機が、空中でB29の上に乗っかったという話も聞きました。それくらい大きいってこと。あの時は人もずいぶん集まっていました。

——工場は狙われなかったんですか。

工場がある佃島では、人がいっぱい死んだようなことはありませんでした。1度、機銃掃射があつて1人亡くなりましたが、それくらいです。軍需工場なんですけれど、爆弾は落ちないし壊されてもいません。やはり民家を狙ったんでしょうかね。家が木と紙でできていますから。空襲初期の頃に、焼夷弾が落ちたら火がボンと落ちて、雪が降っていたので、その塊をポイと投げたらすぐ消えました。なーんだと思っていたんです。でも、それから材料を変えたんですね。空中で火がついて、ゴムみたいなものが燃えながら屋根に落ちて。これが水をかけても消えないの。どんだん燃えてしまう。消火器もないでしょう。消火作業といったらバケツと水だけです。火が屋根にこびりついちゃうんで



3月10日の空襲では国会議事堂の辺りまで焼け野原になった

学徒動員

徴兵による労働力不足を補うために学生・生徒が軍需産業などに送り込まれた。昭和19年7月には動員対象を中学低学年・小学校高等科にまで拡大、1日10時間労働、中学3年生以上の男女の深夜作業が実施された。

軍需工場

戦争に使う飛行機や戦車を作る工場。大戦不可避の予想から昭和15年5月、陸海軍工場事業場管理令施行規則が施行され、軍需工場の国家管理が強化された。一般工場は主力を軍需品生産に転換、町工場でも兵器作り。中学生以上は勤労働員され、生産に従事した。

すかね。ちょっと触れると、そこがバーツと燃えてしまうんですよ。

疎開先が焼けて自宅は残った

——ご自宅のあたりは被害が少なかったんですか。
このあたりは大きくやられたことはありませんでした。3月10日夜の本所・深川の空襲では、消防隊が車に乗ったまま焼けて犠牲になったなどの話を聞きました。あれはすごかったです。

3月10日の時は、東京はかなりやられました。ほとんど平らになっちゃって、家から両国橋も見えなし、国会議事堂もすぐ近くに見えました。
——このあたりは焼け残って、まわりは議事堂の方まで焼け野原なんですか。

コンクリートの建物は神田警察、学校、島津製作所くらいで、あとはだいたいの木造ですからね、燃えますよ。それに、学校や駅がやられないよう、そのまわりは強制的に建物を倒していました。柱にひもをつけて、10人や20人がかりで引つ張るんです。他に道具もないから手で壊すんですね。弁償金べんしょうきんみたいなものも多少はくれたんじゃないでしょうか。強制ですけど。うちは学校の前ですが、ちょっと距離があるから、それはありませんでした。

——疎開はされなかつたんですか。

弟たちは小学校の学童疎開がくどうそかいで高崎のお寺に分散していました。食べ物がなく、畑のキュウリ

を盗とって怒られたと言っていました。家族でも、まわりが疎開しろ疎開しろと言うんで、一時、新宿の中井で過ごしました。あの頃は売り家や貸し家がたくさんあったんです。まわりには畑もたくさんあって、いい家でした。僕はそこから越中島に通いました。でも疎開先の家が焼けました。隣のおばちゃんが電灯をつけていたからだと人は言っていました。焼夷弾です。さっき言ったように消えない。どんどん燃えていって。私たちは疎開先が焼けて、神田の自宅は残ったんです。それで親たちは埼玉の幸手さいてへさらに疎開し、僕は工場の仕事があるから姉と2人で神田の家に戻りました。

戦後は配給の魚を売り歩いた

——戻った家はそのままでしたね。

でも物はほとんど残っていません。疎開先を持って行って丸焼けになっちゃったから。自宅も貸していましたし。戻った時も借りている人がいました。3軒長屋のうちの2軒がうちなんです。姉と帰った時は隣に他の家族が住んでいました。そういう家が当たり前だったんです。小さい家は5坪つばくらい、うちは2軒だから14坪。1階に小さい部屋と土間、台所、2階も部屋があって、そこに10人くらい住んでいました。子供は5、6人いて、押し入れの中に布団ふとんを敷いて寝ていました。今のように、1人に布団1



戦後、魚の配給をしていたときに使っていた鐘

枚なんていう贅沢ぜいたくなことはありませんでしたよ。

——終戦の時、玉音放送は工場で聞いたのですか。

そう。あの日はお天気が良くてね。天皇陛下の重大放送があるということでした。けれど僕らじゃ言っていることが難しく分かってなかった。大人が、負けたって教えてくれました。茫然ぼうぜんとしましたね。もっと頑張れなかったのか。憲兵隊が工場にも入ってきて、暴動が起きないよう鉄砲を抱えて立っていました。家の方に帰ってからも、町は静かでした。これからどうなるのか、不安も大きかった。食べ物もないし。皇居にかなり人が集まり、割腹自殺かつぷくじさつもあつたと聞きましたが、どうなのでしょう。僕は見ていませんけれど。

——戦後の暮らしはどうでしたか。

食べ物がないで大変でした。汽車の中で闇米の取引もありました。でも警官に見つかると没収ぼっしゅうされます。米とか芋を赤ん坊のようにカムフラージュして持って来ていました。今の「肉の万世」のあたりには闇市がありました。行けばミルクやいろんな物資もありました。戦争中は公園で何か作れと言われ、おふくろはカボチャなど育てていました。でも、できません。畑じゃなくて公園の土ですから。

魚屋なので魚の配給もしました。神田に40軒ほどあった魚屋は整理されていて、指定された店で働くんです。神田には何人分と決まった量の魚が来て、それをおやじと一緒に売って歩き

ました。僕は鐘を鳴らして配給を知らせていました。米もあまり配給されない時代です。おふくろも苦労して少ない米は雑炊ぞうすいにしていたし、うどん粉で「うどん」をつくり食べました。砂糖もなかったから虫歯もなくなりましたね。

——進駐軍に対して憎い気持ちは。

強い思いはありませんでした。戦争中も、アメリカ人は殺してしまえという感じはまわりにもなかったし、戦争が終わっても、ジープで米兵が来ると皆愛嬌あいきょうがいいんだ。外国人を見たことないから、ハローって言い珍しがるくらい。悔しいという思いもない。戦地から戻った軍人さんには悔しがつている人もいました。

——最後に、若い人たちへのメッセージを。

歴史は書く人によって違います。前から、後ろから、右から、左から、見る方向によっても違う。選挙年齢も下がる今、そこを皆さんなりに勉強して、日本の行く末を考えてほしいと思います。



写真左から、松野さん、木下さん、谷垣さん、大須賀さん

叔父は1枚の紙になって帰ってきた

営業写真家として知られた父の「竹田写真館」を平成22（2010）年まで引き継ぎ、千代田区議会議員としても活躍してきた竹田靖子さん（79歳）。九段に生まれ、2度の疎開生活を過ごした戦争時代は、その生き方の根幹を作っていたとも言えます。

最後の写真を撮りに来た出征兵士たち

まず、お生まれになった年と場所、ご家族を教えてください。

昭和11（1936）年生まれの79歳です。ここ九段の生まれです。私の両親は亡くなっていますが、父と母、4歳下の弟がいました。

お父様は靖国神社の近くで写真館を営んでいたそうですが。

父は樺太の出身でした。北海道で写真の修業をしてから赤坂の写真館に入りました。腕がいいと言われていたそうで、絵描きだった母方の祖父や祖母も呼んで、昭和10（1935）年に九段の表通りで独立開業したんです。今、トヨタビルがある一角がスタジオ兼住居。私はその翌年に生まれました。

靖国神社にお参りした兵隊さんの写真を

撮っていたと聞きますが、記念写真ですか。

出征前に、タスキをかけて本殿に参拝し、帰りに家族写真を撮るんです。兵隊さんを真ん中に家族で囲んで。もう帰って来られないかもしれないから、最後の写真ですね。靖国は特殊な神社なので、皆、写真を撮っていました。だから神社のそばには何軒も写真館があって、それなりに繁盛していました。ところが戦争が始まってしばらくたつと、兵隊さんの顔がどんどん若くなっていくんです。職業軍人ではなく、赤紙で召集される人たちです。親もそう話していたし、私自身も覚えています。幼稚園から小学3年までの間、ずっとそれを見ていたんです。もちろん写真館ではふだんは普通の写真も撮りますよ。でも戦争が進んでいくと、写真を撮ろうなんていう気持ちもなくなっていくますよね。



たけだ やすこ
竹田 靖子

九段南

インタビュアー

西山侑里（高校2年生）

谷垣柚乃（高校2年生）

大須賀 龍（高校1年生）



——兵隊さんが年々若くなるというのは。

年々といっても短期間です。4年間のアジア太平洋戦争の後半、どんどん戦局が悪化していった。幼稚園児での記憶ですから定かではありませんが、最後の1年から2年の間でしょうか。最後は中学生も動員されたくらいですから、おじさんからお兄さんになっていくという印象でした。

——靖国神社は子供にとっても特別な神社でしたか。

そうですね。まず戦争の最初の頃、天皇がお参りに来られました。でも姿を見てはいけません。神社の石垣沿いには商店に向かって憲兵がずらっと立っているの。のぞき見る者がいないようにするためです。写真館の2階も全部カーテンを閉めさせられました。でも私、幼稚園児だから、パーッと家から飛び出したんですね。そしたら憲兵が飛んで来て「何やっとなるんだ」と怒られました。父がすぐ謝ったんですが怒鳴り散らされ、近くをよく知っているお巡りさんがすっ飛んで来て謝ってくれ、やっと収まりました。

叔父は場所も知れない地で戦死

——身近な方も戦争に行かれましたか。

叔父です。母には2人の弟がいて、1人は体格が弱くて家にいましたが、もう1人は体格も良く、中卒で築地の魚河岸に入って、マグロの卸

問屋に勤めていました。本当に元気な人で、私

もかわいがってもらっていました。召集されたのは戦争の終わりの頃、叔父は20代前半、私は小学1年になっていたと思います。出征する人は赤羽駐屯地に全員集められていたのですが、そこを家族皆で訪ね、最後の旅だと伊香保温泉に1泊旅行に行きました。お風呂に入り、その叔父が、温泉街の露店で買ってきてくれたトマトにお砂糖をかけて食べました。何も無い時代に食べた、その味は今も忘れられません。

叔父が亡くなったのは南方というだけで、どこなのかは分かりません。正義感のある人だったから、仲間が殴られるのを見ると、上官にも臆せず抗議したり、仲間を助けたりしていたと聞いています。だから前線に送られたのだそうです。

——戦死が分かったのは知らせがあったのですか。

白木の箱が返されました。お骨もない。髪の毛すらない。「中村金次郎霊」という紙キレ1枚が入っているだけです。母はわーっと泣いて。私は子供でしたが、祖母が縁側に行つてその箱を抱き、叔父の名を呼びながらずっと泣き続けている姿を見ていました。紙の他は何も入っていない箱を抱いてです。

私は靖国神社に叔父が英霊として祀られているとは思えないんです。幼稚園からカトリック系の白百合学園でしたが、校長は靖国の前を通るたびにお辞儀をするようにと指導していま



憲兵

旧陸軍兵科の1つ。陸軍大臣の管轄下にあつたが、アメリカのMP（陸軍）より権限の範囲は広く、陸海両軍内の警察業務を担当したほか、内務、司法省にも所属した。軍機保護、徴兵・召集などの法令施行、軍紀・風紀の監視、軍人軍属関係の犯罪捜査などにあたり、軍備拡張に伴い強化された。

千鳥ヶ淵戦没者墓苑

昭和34年に国によって建設され、戦没者の遺骨が埋葬されている墓苑。第二次世界大戦において広範な地域で戦闘が展開されるなかで、海外の戦場で多くの人が戦死した。戦後、持ち帰られた遺骨のうち、名前の分からない戦没者の遺骨が納められた「無名戦士の墓」であるとともに、慰霊追悼のための聖苑でもある。

た。でも私はできなかった。今もそうです。無名戦士の墓である千鳥ヶ淵戦没者墓苑には、拾ってきた兵士たちのお骨が祀られているので、もしかしたらそこに叔父もいるのではとも思います。また最近、「中村」と書かれた飯盒を南方現地の人が使っているという新聞記事を読み、叔父のものではないかと思ったりもします。もちろん200万人も亡くなった中に「中村」なんていっぱいいるでしょう。まだ収集しきれしていない遺骨もどれほどあるか。それを考えると、まだ償われていない戦争の責任って誰にあるのだろうかと思いますね。

辛い日々を送った疎開先

——学校では疎開はされたのですか。

学童疎開はありました。昭和19(1944)年、小学2年生のときです。学校が強羅に設けた分教場きょうきやうに行きました。人数は少なかったですよ。家族で先に疎開している人も多かったから。ここでは辛かったですね。上級生が先生と一緒にいろいろな注意してくるのが低学年には辛かった。毎日毎日、アレしちやいけな、コレしちやいけないと。早くお母さんのところに戻りたいと思うばかりでした。

——食事はどうでしたか。

修道院しやうどういんの一角だったでしょうが、テーブルもないので長い板を机にして、向かい合わせで食べていました。食料は乏しく、出てくるものは

ご飯と味噌汁みそじゆとらっきょう、アミの佃煮つくだにくらい。らっきょうが苦手な子もいて、私はらっきょう好きだったので机の下から回ってくるの。先生の目を盗んで食べ、器だけ返すんです。ご飯も白米ではないですよ。芋が入っていたり麦が入っていたり。小さなどんぶりに入っていて、おかわりはできませんでした。山では薪まきを拾って、それでご飯を炊いたりお風呂を沸かしたりしていました。

月に1回くらいは親が面会にきました。おやつの差し入れは禁止でした。持って来てもらえない子もいるから。でもやはり親心で隠して持って来るんです。おやつと言ってもお芋ですよ。そして皆、それを脱衣所でこそそと食べる。たぶん先生も分かっている目をつぶっていただいでしょう。

——終戦までそこに疎開していたのですか。

分教場にいたのは数カ月くらいでしたか。昭和20(1945)年5月25日の空襲で家が焼け落ちるのを見ましたから。その後、栃木県小山市に家族で疎開して、その小学校に通いました。住んだのは、親が懇意こんいにしていた人の持ち物で納屋みたいなところでした。空襲のない田舎だから、学校も普通に授業していたんです。でも、都会から来た子って偉えいそうに見えちゃうんでしょか、そんな気はないんですが、なにかにつけてもはじかれるんですよ。

——都会の子はいじめられるのですか。

例えば家から学校までの間、30分か40分くら



千鳥ヶ淵戦没者墓苑。第二次世界大戦の戦没者の遺骨のうち、遺族の手に渡せなかった遺骨を埋葬している

い森の中を通るんです。今思えば、森というより林くらいだったかもしれない。それが、都会から来たまだ小さな子にはすごく怖い。通学を心配した親が、連れて行ってくれる近所の上級生に10円あげるんですね。するとしばらくは一緒に歩いてくれるけれど、1カ月くらいで効力が切れ、森に置き去りにされて泣きながら家に帰る。それでまた親がおっと10円を渡す。そういうことの繰り返しでした。

——そこは食べ物豊富だったのでしょうか。

いいえ。何もないから畑のキュウリをもぎったりしました。昨日播いた人糞が乾ききっていないところに入って、バリバリ食べたりしていましたね。けれど東京よりはあります。九段に戻ってからも、ここにお米などもらいに行きました。私も行きましたよ。上野だか市ヶ谷だかにお巡りさんが立って検問していて、大人は見つかると没収されるんですが、子供なら小さいから目が届かないでしょう。それで背中に背負ったまま、靖国神社に向かって一目散に逃げる、逃げる。けっこう重かったんですよ。でも当時は必死でしたね。

大空襲を逃れた人々への「おにぎり」

——大空襲の時は東京にいましたか。

3月10日、5月25日とも、学童疎開先から九段の家に帰宅していました。空襲が多くなった頃、男は出征していて、消防団には女子供しか

いなくなっていました。うちの父はたまたま召集されず、もう1人若い男の人もいて、このあたりが空襲されると2人で火を消していたのは鮮明に覚えています。

3月10日は下町が焼け野原になりました。皆、下町の方から山の手に逃げて来ました。靖国通りも通ります。空襲の翌日でしょうか、焼け出されて着の身着のまま、子供連れで歩いていくんです。その時はうちの写真館は大丈夫でした。それで祖母はおにぎりを作り、写真館の前に行く人に配ったんです。

——それはどうしてなんですか。

どうしてだと思えますか。

——そういう係だったんでしょうか。

係ではないの。うちの祖母は気前のいい人でね。「家の人の口をつねつても人にあげてしまおう」と言われていました。小豆が手に入れば、お汁粉を作って近所の子を集め、お汁粉パーティをするような家でした。だからその時も、家の防空壕にお米があつたんでしょう。おにぎりを作って、皆にあげようと考えたんですね。

——続く5月の空襲では、家も焼けたんですね。

あの日、弟と私は祖母に手を引かれ、焼夷弾がわーっと降ってくるのを避けながら逃げました。でも逃げると言ってもどこへというものもありません。防空頭巾に水をかけても、炎の熱気ですぐに乾いてしまいます。それでまた水をかけようと、持って出たバケツを見ると、取っ手だけになっていて本体が残っていない。それ



5月25日の空襲で逃げた社務所のある靖国神社

に気づかないくらい夢中で逃げていたんです。焼夷弾というものはもう、太い棒のような形でバンバンと落ちてきます。そんな中を逃げて、よくもまあ体に当たらなかったものです。

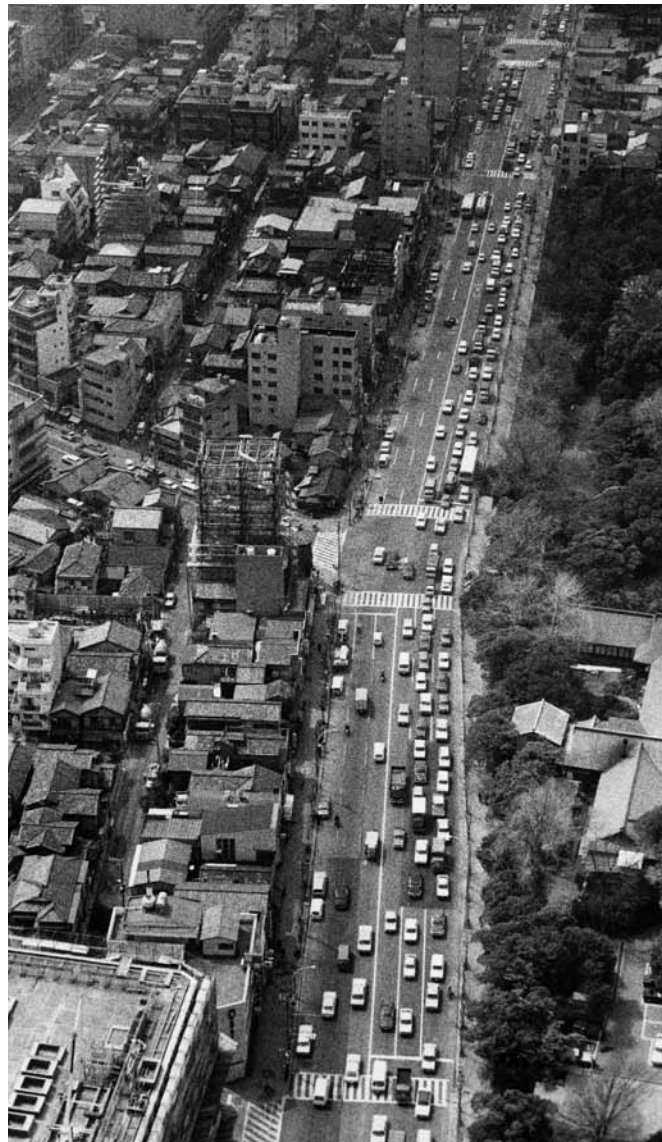
逃げた先は靖国神社でした。大きな木があったから直撃を受けなかったんですね。そこから燃える写真館を見ました。なんというのでしょうか、嫌だとか悲しいとかでもなく、ただ茫然と。今も、家が燃えていくその光景を思い出します。

—— 周辺は全部焼けてしまったんでしょうか。
ほとんど焼けました。残ったのは1軒と半分でした。靖国通りの角に大きな料理屋さんとお菓子屋さんがあった、料理屋さんはそっくり残り、お菓子屋さんは父たち消防団が2階に上がって、途中で消し止めたそうです。消し止めると言っても命がけですよ。何枚もの布団を濡らして掛け、それで火を止めるんです。そのお菓子屋さんは「宝来屋本店」といって、今も残っています。

焼け跡で焦げた砂糖のおいしや

—— 当時は、まわりの人たちはどういう様子だったのでしょうか。

人がどうだったか、皆自分のことで手一杯で分からなかったのではないのでしょうか。家が焼けた後は、靖国神社の社務所が残っていて、大きな台所もあったので、落ち着くまで近所の人



昭和 30 年代の九段南付近

たちと泊めてもらいました。そしてある日、ほんわかといい匂いがしているなあと、匂いをたどって行くと、うちのそばの商店が並んでいたあたり、乾物屋さんが焼け落ちたところに、ぼっかりと地下に行く階段があったんです。それで皆で降りてみますと、お砂糖が麻袋に入ったまま、真っ黒に焼けていました。

戦時中はお砂糖もお米も配給ですから、そんなものが地下にあるとは誰も思いません。その家は疎開していて、いないからもう天下御免です。しばらくはそれをもたらせてきてお三時にしていました。そのうち、配給の砂糖があんなに残っているのはおかしいと大人たちも言い出しました。後から想像すると分かりますが、当時の子供たちにとっては「お砂糖が食べられるー」って、すぐくうれしかったですね。

——その頃は食事も苦勞されたんですね。

お米は配給だから、親たちは苦勞して調達していました。なくなればお芋やすいとん。その方が多かったですね。白米のご飯はほとんど食べられません。もちろんおかずもない。だから皆、栄養失調になるんです。するとオデキが出来ます。足の甲に出来て、どんどん深くなるの。膿も溜まっていくけれど、つける薬もありません。私、今も跡がありますよ。

また、薬と言えば、シラミを取る殺虫剤のDDT。大きな噴霧器で白い粉を頭に撒くんです。頭の毛ジラミって、手では取れないんですよ。上野の地下道で生活している浮浪児がよくかけ

られていたけれど、学校でもやるの。何年前、DDTはとても毒性が強いと分かったらしいですが、よく皆、どうもならなかったと思います。

「おにぎりをもたらした人」との出会い

——戦中戦後の学校教育はどんなものでしたか。

私はまだ小さかったからそんなに分かりませんでした。現実には起きていた戦争が反映されていたのを感じました。朝は皇居に向かって最敬礼しましたね。それはどこの学校でもやっていました。

校舎が焼けてしまった後は教室もありません。鶏小屋の鶏は食べちゃってますから、戦後すぐは鶏の糞の溜まった小屋を掃除して授業をしていました。私立で遠くから来ている子が多かった。戦後に再開してもそんなに人数もいませんでしたし、ある程度は広がったのですが、夏はすっごく臭かったですね。その後は校庭にカマボコ兵舎のようなものを建てて使っていました。これは風の通り道がないから夏はすっごく暑いし冬は寒い。マスール（先生）もしもやけになり、手が風船みたいになって、ちょっと触るだけで痛いって。栄養が足りないから、血液の循環も悪いです。かわいそうでした。

——焼けてしまった家はどうしたのですか。

疎開先から戻ってすぐ、両親がトタンとか木を集めて家を作りました。元の家は、建物ほう



皇居坂下門。当時は日常生活の中でも節目節目に皇居に向かって最敬礼していた

ちのものでしたが、土地は借りていたんです。少しでも早く家を建てれば、借りていた土地の権利が保持できると聞いて、バラックを建てて家族5人で住み始めました。

——戦争がなかったら、ご自身の人生は違っていたと思われませんか。

叔父のように自分の命を取られた人は、その時点で人生を閉ざされてしまいます。自分の子孫も残せませんでした。小学生だった私は、戦争で人生が変わったということはないでしょうけれど、6年生の時に受洗じょせん（カトリックに入信して洗礼を受けること）したのは、やはり地獄に落ちたくなかったからです。その頃のカトリックって、悪いことをしたら地獄に落ちると教えられていました。それ以来、権力とか体制の不合理とかに、自分なりのアンテナで抵抗ていこうし続ける人生になりました。やはりそれは、戦時下の経験や、叔父の死があったからだと思うんです。

——今、竹田さんの人生で大切にしていることを教えてください。

とにかく平和でなければいけません。私だつてケンカはしますよ。きょうだいでも周りとも。でも殺し合いになるようなことをしてはいけません。その信念を持って、体力が許す限り抵抗していきたいです。それが叔父や、あの戦争で亡くなった人たちへの償つぐないだと思うんです。戦争は、いったん始めたらノンストップ。始まってしまう前には、自分の国に都合のいい理屈を

いろいろ付けるものです。話し合い、理解し合うことが大切ではないでしょうか。

今から20年ほど前ですが、私が区役所に関するようになって、ある人から「親や祖母が空襲から逃げた時、九段の写真屋さんでおにぎりをもらってとてもありがたかったと言っていたけれど、そういう話を聞いたことありますか」と尋ねられました。ああ、うちの祖母のことだと。あんなにうれしかったことはありませんでした。

戦争体験は一人ひとり違うでしょう。それを次の世代にバトンタッチしていかねければと思います。一つひとつの体験に耳を傾け、聞いたことを思い出してほしい。そして歴史を検証けんしょうしつつ、自分に問いかけることを忘れないでほしいと思います。



写真左から、西山さん、大須賀さん、竹田さん、谷垣さん

焼け残った椅子を使い、焼け跡で行った無料理髪

根岸幸三郎さん（100歳）は、麴町3丁目で明治35（1902）年から続く「根岸理容室」の2代目。昭和10（1935）年、20歳のときの徴兵検査では兵役免除され、昭和19（1944）年、29歳で召集がかかるもの、不合格となり麴町に戻ります。理髪店をやりながら体験した空襲や当時の生活の様子をうかがいました。

兵役免除の身に召集がかかる

——まず根岸さんご自身についてお聞かせください。

大正4（1915）年生まれ、今年で100歳になります。

——麴町大通り沿いで理髪店をされていたのですね。

うちの店は明治末期に父親が始めました。今はもうなくなりましたが、神田に明治理髪学校がありまして、私はそこに通いで修業に行きました。けっこう名の通ったお店のせがれが集まっていたですね。学校で理髪を習い、帰ってからは床を掃いたり、タオルを洗濯したりとお店の手伝いをしながら仕事を覚えていきました。

——当時の麴町の様子を教えてくださいませんか。

その当時、麴町大通りは舗装していません。電車（市電）は通っていました。自動車はあまり見かけなくて、行き交っていたのは主に馬が荷物を引く荷馬車です。それから人間が引く荷車ですね。その程度のものしか走っていませんでした。

——徴兵検査はいつ頃受けられたのですか。

昭和10年、20歳のときに徴兵検査を受けました。当時、日本国民の男は全員、20歳で兵隊に向くかどうかの徴兵検査を受けました。「甲乙丙丁」の階級があり、私は身体があまり頑健ではないため、「丙種」でした。丙種は兵隊に向かない、つまり不合格ということで兵役免除になりました。それから、自分でも体を丈夫にしないといけないと思い、特に食べる物には気をつけていました。

——その後、しばらくして召集されたのですか。



ねぎし こうざぶろう
根岸 幸三郎

麴町

インタビュアー

泉 政秀（区内在勤者）
内藤 望（大学2年生）

終戦の1年前の昭和19年の8月、29歳のときに召集令状、俗に言う「赤紙」が届きました。「横須賀の海兵団に入団すべし」という内容です。前回の徴兵検査では兵隊には不向きだと免除になったのに、私みたいな丙種を召集するということはよほど兵隊が足りない状況だ、これは日本も大変だぞと感じていました。そして数日後には出征となりました。

——召集令状が届いたとき、ご家族はどのような様子でしたか。

そのとき、家内はお腹が大きかったんです。人前ではそんなことはありませんが、台所ではめそめそ泣いていました。戦争に行くということはまず戦死を考えます。もう帰ってこないのだな、今生のお別れなのだなという切羽詰まった思いだったのでしよう。

——根岸さん自身はどのような気持ちだったのでしょうか。

それはもう無我夢中ですから、もちろん泣いたりはしません。同じように兵役免除後に召集された学生時代の友達2人と一緒に四ツ谷駅まで向かいました。

——見送りはどのような感じだったのですか。

愛国婦人会や国防婦人会、近所の方たちが日の丸の旗を振り、「歓呼の声に送られて」の軍歌で見送られ、四ツ谷駅では在郷軍人の方たちに激励されました。ただ、以前はもっと賑やかにやったのですが、終戦が近くになると出征する人も少ないし、あまり派手にはやらなかつ

たですね。

四ツ谷駅で省線電車(国電Ⅱ現J.R)に乗り、横須賀へ向かいました。シャッターは全部降ろされて、中に乗っている人が分からないようになっていました。軍専用でしたから、横須賀までノンストップでした。

——横須賀海兵団はどのようなところだったのでしょうか。

横須賀海兵団に着いたら、係りの人が「どうもご苦労。どうぞこちらへ」と兵舎に案内してくれました。そして2日くらいは特に何もせず、食べる物だけはちゃんと食べさせてもらって過ごしました。海軍は就寝のときはハンモックなんです。ところが私は背が低いものですから、つったハンモックにのるのが大変で。そのうえ、天井に暖房用のパイプが通っているのですが、若い下士官がそこに寝ていて、私たちが何をしゃべるのか聞いています。召集された所帯持ちの中には愚痴をこぼす奴がいるんですよ。どこで何を聞かれるか分からないから、あまりしゃべらないほうがいいと気をつけていました。

真夏でしたから喉が渇いてしょうがなく、トイレの水も飲みました。そうしたら、お腹を下して痔になってしまったんです。3日目に兵隊にとるべきかどうかという検査がありました。が、軍医に「君は体は丈夫ではないし、痔にもなっている。これではどうても無理だから、不合格のところへ入りたまえ」と判定を下され、

赤紙

旧軍が出した召集令状の通称。徴兵・徴役1字の違いといわれた令状の紙の色が赤かったことから、こう呼ばれた。



横須賀海兵団に出征時の根岸さん

不合格にされてしまいました。「歓呼の声に送られて参りましたから、ぜひ兵隊にとってください」とお願いしましたが、「君の心情はよく分かる。けれども無理なものは無理だ」と。

そして、15時頃に「それでは、不合格の方はこれから自宅へ帰ってください。前線も銃後も変わりはないから、これから銃後で活躍してください」と言われ、横須賀から四ツ谷まで帰されました。夕方でしたからそのまま家に帰ったのですが、家族からは脱走してきたのかと思われました。脱走というのは国賊ですから大変なことです。「証明をいただいているから心配しなくても大丈夫だ」と理由を説明し、ようやく父も母も家内も納得しました。家内は言葉にならず、安心したという顔をしていましたね。

そして、隣組の群長にあいさつに行きました。「実はこういう事情で、恥ずかしいのですが帰って参りました」と話したら、小さな声で「それはよかったですね」と言われたのを覚えています。戦争中にそんなことを言ったのが他に知られたら大変ですよ。

5月25日の山の手大空襲を経験

——横須賀海兵団から帰ってきてからどうされたのですか。

もちろん、すぐに仕事を再開しました。当時はいんな防護団に入っており、私も特別警防隊に入っていました。というのも、お巡りさんも

出征して警察も手が足りないんです。なにも泥棒を捕まえるというのではなく、麹町警察署のお巡りさんと2人組になって、警報が出たときの伝達などを行っていました。

——麹町は5月25日の山の手大空襲での被害が大きかったと聞いています。その日、根岸さんはどうされていたのでしょうか。

警防隊としてお巡りさんと一緒に行動していました。麹町警察署の前のお宅の玄関が広いものですからそこに待機していたところ、焼夷弾が落ちました。焼夷弾が落ちたら、火たたき（棒の先に縄をなつたものを付け、それを水に浸したもので火の粉をたいて消せと言われていました。でも、火が跳ねるほうが強いから、そんなものではまっただめです。近くにトタン板があったので、そのトタン板をかぶせたのですが、火がパーツとトタン板を突き抜けていくんです。お巡りさんが「これは危ないから、自分たちの身を守るために避難しましょう」と。それで、他の警防隊の人と避難しました。

麹町警察署の右隣が麹町区役所で、そこへ入ろうとしたのですが、1人が「もう少し先へ行こう」と言うので、英国大使館のほうへ向かいました。ところが、あのあたりの桜の木は古いため、幹がみんなうろ（空洞）になっていて、そこへ火の粉がどんどん吹き付けるものですから燃えさかっているんです。そんな状況で前を見たら、防空頭巾をかぶった女の人の背中が燃えている。当人は逃げるのに必死ですからまっ



銃後

戦争の現場を「前線」と呼ぶのに対して、直接には戦火に巻き込まれていない国内を「銃後」といった。太平洋戦争末期には銃後と前線の区分はなくなった。

たく気づきません。その人の背中の火を夢中で消してあげました。英国大使館の前には軍馬の防空壕がありました。馬が入るくらいですからかなり深く掘ってあって、そこへ軍馬をみんな収容していました。

私たちはさらに代官町の方へ逃げました。あのあたりは燃える物があまりありませんから。無我夢中でした。麴町の方を見たら燃えています。でも、そういうときでも、自分のうちだけは燃えないと思っっているんですね。そのうち夜が明けて明るくなりましたから、麴町へ戻ろうと歩き始めましたが、新宿の方まで焼け野原でした。もちろん、自宅も店も燃えていました。何にもない、そんな状況でした。

あとから聞いたのですが、近所の人たちはみんな麴町区役所の地下に避難していました。爆弾が破裂すると大変だということで、ガラスが突き抜けないように、窓に4寸角の材木を積み重ねていたそうです。そうしたら、それが仇になりました。その材木に火が吹き付けてきて、中に火が回ってしまったのです。あそこで大勢の方が亡くなりました。

——ご家族はどうされていたのでしょうか。

父親は防空壕へ避難して無事でしたし、家内や子供たちは疎開させていました。知り合いが千葉県の銚子にいたので、そこへ疎開をお願いしました。銚子は艦砲射撃があるから危ないのではないかと言う人もいましたが、それは大丈夫だったようです。なんとといっても、銚子では

食べ物が入ったのですよ。魚もありますし。少し落ちていて国電が走るようになってからは、東京へ出てくるついでに食べ物を持ってきてくれたこともあります。それも運がよければですが……。というのも、途中で警察がお米などの食べ物を持っていないか検査に入りますから。実際に没収された人もいました。警察の人も辛かったらと思うのですけれどね。

——では、ご家族はみんなご無事だったのですね。
5月25日は、私の目の前で亡くなった方はいませんでした。でも、先の3月10日は下町の方が空襲でやられました。妹がそちらへ嫁に行っていましたから、心配して父親と2人で歩いて浅草へ行ったのですが、見つかりませんでした。きっと隅田川に飛び込んだのでしょうか。とうとう行方は分からずじまいでした。

浅草の方でも大勢の方が亡くなりました。みんな荷物を持って逃げていましたから、荷物に火がつき、橋の上で火事が起きてしまつて向島の方へ渡れなかったそうです。向島は焼けていないのに、死ぬと生きるは本当に紙一重ですね。浅草の商店街から東武鉄道へ渡るところで、普通の格好をしている人が立っただまま亡くなっているのを見ました。どうしてかと思いましたが、火災で煙にまかれ酸素がなくなり、それで立っただまま亡くなったのでしょうか。浅草の観音様の後ろでは、軍隊が焼けた人たちを積み重ねていました。衣類は焼け、身体も真っ赤になっていますから、男の人か女の人か識別もできま



大正時代の祭り風景。右手奥に見えるのが、根岸理容室

せん。そういうひどい状態でした。今でも浅草へ行くと、当時を思い出して心の中で手を合わせます。

焼け残った椅子で無料理髪を行う

——自宅が焼けてしまっただけのように生活していたのですか。

うちの近くには道路に防空壕が掘ってあったので、しばらくはその防空壕へ避難してその中で生活しました。

——食事はどのようなものだったのでしょうか。

配給制度がありましたから、それをいただいでいました。お米のかわりにコッパンなどすぐ食べられる物が配られました。3食1日分として何日分かが配給になりましたが、お腹がぺこぺこなものですから明日の分も食べてしまふ。明日はなんとかなるだろうと（笑）。なにしろ、お腹は減っているし食べ物はないし、散々たるものでしたね。

——理髪店はどうなったのでしょうか。

うちの弟子が下町の方で店をやっていたのですが、3月10日の空襲で焼け出されたので、うちに避難してきて生活していました。麹町大通りから善国寺坂に上がるところの道路が少し広くなっているのですが、弟子は空襲の経験があるものですから、5月25日のとき、そこに椅子を引っ張り出してくれたんです。自宅や店は焼けましたが、椅子2台が焼け残ったので、「そ

れじゃあ、無料で理髪をやるう」と。道具は靴に入れて持っていますから、せめて髪の毛を刈るだけでもやろうと無料理髪をやりました。どこにも髪の毛を刈るところがないので、お客さんがとても喜びましたね。遠方からいらっしやったのか、見たことのない方も多かったです。洗ったり顔をそったりなどはできないものですから、ただ短く刈るだけです。それだけでも喜んでくれました。

——根岸さんは戦争の終わり頃、日本が負けるかもしれないということは考えましたか。

日本の勝利を信じていましたから、そういうことは考えないです。けれども、そうはいかなかったですね。B29も大量に飛んでくるし、飛行機でもなんでもアメリカの物量には負けますから。

——麹町にもB29は飛んできたのでしょうか。

ええ。今の国立劇場のところは当時、広場になっていました。そこへ米兵が落下傘で降りてきたことがあります。捕まえて警察へ連れて行ったのではないのでしょうか。そこで殴ったり暴行を加えたりということはなかったようです。

——当時、飛行機がまくビラや金属を拾うと怒られたとうかがったのですが、どういうことでしょうか。

米軍が懐柔策を書いた伝単（宣伝ビラ）を飛行機でまいていて、それを拾って見てはいけないと言われていました。金属は、電波を攪乱



昭和20年8月、米軍機からまかれた伝単（宣伝ビラ）（角田美さん提供）

するためにやはり飛行機がまいていたもので
す。

——8月15日、終戦を迎えたときのことを教え
てください。玉音放送はラジオで聞きましたか。

幸いラジオはありましたので、防空壕のなか
で陛下のお言葉を聞きました。戦いをやめると
いうことをおっしゃいましたから、二重橋の前
でひれ伏した人もけっこういたようです。終戦
になっていちばん嬉しく思ったのは、明るく
なったこと。夜は電気にカバーをかけ、灯りが
漏れないよう下だけ照らしていたんです。カ
バーを全部外したら明るくなって、それがもう
いちばん嬉しかったです。やっぱり、明るいと
いうことはいいことですね。

——理髪店を再開したのはいつ頃ですか。

そのうち、バラックの配給が始まりました。
たしかお金は少し払ったかと思いますが、希望
者は申し入れをすることができました。簡単な
バラックですから、素人が組み立てられるよう
な建物です。私には大工の友達がいましてし、
さらに3丁目の材木屋が「材木いるなら持って
いきな」と太っ腹なことを言ってくれるなど、
いろいろと恵まれていました。雨露をしのぐ程
度ですがお店と住まいを作らせてもらい、理髪
店も再開しました。

——終戦後、アメリカの兵士はこのあたりも来
たのでしょうか。

ジープに乗って来ていましたね。子供たちが
手をふるよ、ジープを停めてチョコレートやな

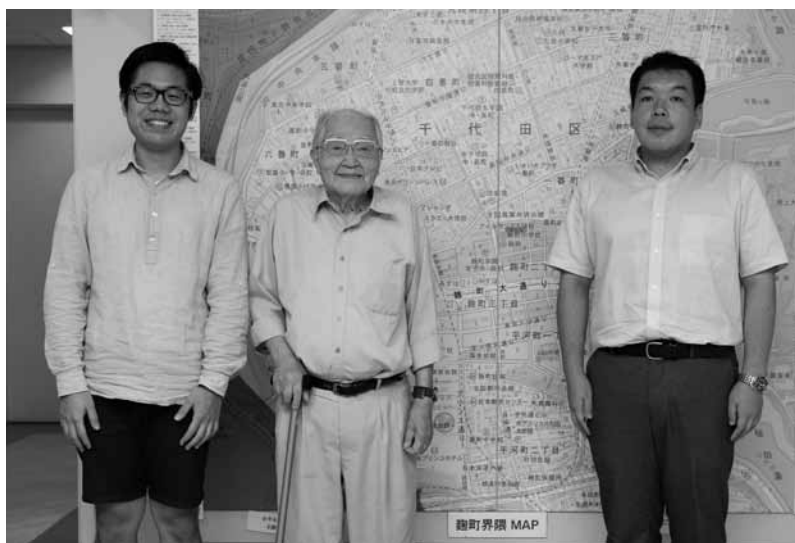
んかを子供たちにあげていました。どこでも子
供はかわいいんですね。

——配給では砂糖をバケツ1杯もらうことも
あったでしょうか。

米軍からの配給でお米が間に合わなかったら
しく、バケツ1杯のお砂糖が届きました。甘い
物が不足していますから嬉しいですけれども、
バケツ1杯もらってもね（笑）。それから小麦
粉も届きましたね。懇意のパン屋さんが「持っ
ていらっしやいよ、パンにしてあげるから」と
言ってくれたので、その小麦粉は頼んでパンに
してもらいました。そうやって、なんとか命を
つなぎました。

——貴重なお話をありがとうございました。最
後に今の若い世代へぜひメッセージをお願いし
ます。

戦争を経験してきて思うのは、戦争でいった
い誰が得するのだろうかということです。戦争と
いうものは誰もが得することではない。平和が
いちばんです。二度と戦争を起こさないでほし
い、平和な世の中を継続していただきた
いと思います。



写真左から、内藤さん、根岸さん、泉さん

巣鴨プリズンで東条英機が最後に望んだ「サンマ」の塩焼

昭和2（1927）年生まれのため徴兵はされず、軍需工場で働いていたという広瀬儀光さん（88歳）。戦後は巣鴨プリズンでコックとして働き、東条英機の最後の食事を作るなど多くの貴重な体験をなさいました。

「まだ戦地に行かないのか」と言われて

—— 広瀬さんのご実家は、内神田3丁目で大正4（1915）年から続く氷屋さんだそうですね。

もとは永富町という町名でしたが、昭和9（1934）年の町村合併で隣の神田蠟燭町、旭町と合併して神田旭町になりました。会社名の「旭氷業」は、そこから取っています。私は昭和2（1927）年に生まれ、両親と姉、兄2人、妹2人の8人で暮らしていました。

戦争が始まるまでは、私も父を手伝って氷屋で働いていたのです。しかし軍需産業に関わる仕事についていないと、いつ徴用に採られるかわかりません。そこで当時、潜水艦のディーゼルエンジンなどを製造していた新潟鐵工所の蒲田工場で働きながら、夜間は、東京工業大学の

付属機械部に通うようになったのです。

—— お兄さんたちは、戦争に行かれたのですか。
長兄は徴兵されてシンガポールに。次兄は千葉県松戸で通信兵をしていました。昭和2年生まれの私は、ちょうど徴兵になる前に終戦になりました。

それでも志願して、戦地へ行きたい気持ちはありました。しかし両親にしてみれば兄たち2人が兵隊に行き、残った息子は私だけです。また軍需工場でも、働いているのは女子挺身隊の若い女性や親のような年代のおじさんおばさんばかり。10代後半の若者は私だけになってしまい、「お願いだから志願しないでくれ」と工場と同僚たちからも頭を下げられる。家でも職場でも引き止められ、志願したくてもできなかったのです。

しかし五体満足な若者が兵隊にも行かずにい



戦前の自宅（後右側）前にて



ひろせ のりみつ
広瀬 儀光

内神田

インタビュアー

松野和寛（区内在勤者）

伊達悠二（大学4年生）

三輪田颯真（中学1年生）

ると、近隣の人から「氷屋の三男は、何をもちもたしているんだ」と後ろ指をさされてしまう。あるときは、休暇の日に工場から自宅に帰る途中に憲兵に呼び止められ、「おい学生！ なんぞこんな時間に街を歩いているんだ」と怒鳴られました。私は工場から休暇の証明書をもっていると答えましたが、「バカ野郎！ 第一線に休暇などあるか。今すぐ工場に戻って働け」と返されました。

——戻ったのですか？

戻りませんよ（笑）。「はいっ、今すぐ戻ります」と返事だけして、そのまま家に帰りました。でも見つかったらまた何を言われるか分からないので、自宅にずっとこもっているしかありませんでした。

——蒲田の工場へは、自宅から通っていたのですか。

最初の頃はそうしていたのですが、空襲のために電車がちよくちよく止まるようになってしまいました。そのころ、池上（大森区）現・大田区）に住んでいた同僚の家族が疎開することになり、空き家にするのも不信心だということで、「家賃はいらぬから住んでくれないか」と頼まれて、しばらくそこから通っていました。

アメリカの技術力に圧倒されて

——蒲田の工場へ通っていた頃、印象に残っている出来事はありますか。

東京の高射砲陣地があった頃は、敵機も1万メートルほど上空を飛んでいました。しかし高射砲を爆撃で失ってからは、アメリカの飛行機が低空で飛ぶようになりました。B29がものすごく大きく見えました。艦載機からの機銃掃射に遭ったとき、操縦桿を握るアメリカ兵の顔まで見えました。

空襲で焼夷弾が使われるようになった頃、工場へ向かう途中でその不発弾を見つけたことがあります。工場で分解してみたら、尾の方にはひらひらとしたボロ布が付いていて、弾の中にはドロドロの油脂と、先端の方に赤と青の火薬が入っているのが分かりました。それが地面に当たると、衝撃で2つの火薬が合わさって爆発し、飛び散った油にぱっと火がつくのでしよう。そうして燃え広がった火は、もう消しようがないのです。

——千代田区を襲った空襲も、それで木造家屋がずいぶん燃えたそうですね。

自宅のあった神田旭町も、昭和19（1944）年11月の空襲で焼けてしまいました。

もう一つとても印象に残っているのが、撃墜されたB29の機体を見に行ったときのことです。操縦席の窓ガラスのかけらを工場に持って帰ってみたら、ガラスが曲がったので、「ガラスが曲がる！」とびっくりしました。当時の私たちに窓といったらガラスしか思いつかなかったのですが、B29には樹脂——今でいう強化プラスチックが使われていたんです。



次兄の出征時の様子

——太平洋戦争末期には、石油も足りなくなっていたと聞いています。

日本軍は、飛行機のガソリンもなくなつて、最後には松の根っこをしぼった油まで使うという話ですよ。

——松ヤニが燃えるのは知っていますが、ススや匂いがすごそうですね。

けっこう質の高い油だったそうですよ。しかし松の根など、日本中の松林を掘り返しても大した量は取れません。このように戦争末期というのは、まあじめな状態だった。今の若い人には、想像もつかないことでしょうが。

——日本の技術は、連合国に比べて遅れていたのでしょうか。

そうとばかりは言えないと思います。たとえば私が通っていた学校の校長は、八木アンテナで知られる八木秀次先生でした。八木先生は電波探知機の研究を進めていました。私たちの授業でも「マツチ箱ひとつくり返すことができや武蔵クラスの戦艦をひっくり返すことができ原子爆弾」の話をしていました。ところが日本の軍部は、その技術を採用しなかった。そして連合国側が先に、電波探知機を完成させてしまったのです。

動めていた工場で作っていた潜水艦や魚雷艇の高速ディーゼルエンジンも、かなり高い品質のものを作っていたと思います。しかしアメリカ軍が撃沈した艇からエンジンを持ち帰り、ほとんどの技術を真似されてしまった。高射砲や、

零戦だって、みんなそうですよ。自動車産業が盛んだったアメリカは、自動車工場を軍需工場に切り替えて、日本の技術を参考にして勝るものを開発して逆襲してきました。

また撃墜された飛行機や爆弾を見て思ったのは、アメリカの徹底した合理主義です。日本の製品というのは、たとえば軍用のエンジンでもすべてのパーツを美しく研磨します。しかしアメリカは、たとえばピストンが摩擦するような大事な部分はきれいに磨くけれど、他の部分は真っ黒にススがついたままです。

——よくいえば、日本の職人魂なのでしょうが。

しかしムダといえばムダなのです。また残念なのは、そうした素晴らしい腕を持った熟練工の人たちまで日本軍が次々と徴兵してしまつたことです。そして軍馬の世話のような、まったく畑違いの仕事で酷使していった。その人がその人なりにできる力を生かしていけばいいのに、まったく馬鹿げた兵隊さんのムダ使いではないでしょうか。

——終戦の玉音放送は、どこで聞かれましたか。

工場の事務所です。ラジオは雑音がひどかったし、勅諭も言葉が難しくよく分かりませんでした。続いて放送された解説で「日本は降伏したんだ」と分かりました。軍需工場でしたから職場はその日のうちに解散になり、工場も閉鎖されてしまいました。私は家に帰る途中、皇居前に行つて広場に正座をし、玉砂利に頭をこすりつけて泣きました。周囲にも同じような



新潟鐵工所蒲田工場の入門証



蒲田工場機械部整備課で働いていた頃の広瀬さんと同僚

人が、たくさんいましたよ。中には自決したのか、菰をかぶせた遺体も2つほどありました。

——そこまでの人も、いたのですね。

日本は神国である。だから絶対に負けない！という信念のもとで、戦っていたんですから。それがどういいうわけか負けてしまったのですよ。その衝撃たるや、これもまた今の若い人には想像できないのではないのでしょうか。

巣鴨プリズンでコックになる

——続いて、戦後のお話をお聞かせください。広瀬さんのご家族は、皆さんご無事だったのですか。

おかげさまで、両親と姉、妹たちとは戦争が終わってすぐに顔を合わせることができました。通信兵だった次兄も千葉の松戸から戻り、アンダマン諸島でイギリス軍の捕虜になった長兄も3年後には帰国することができました。親戚では従兄弟が1人、乗っていた輸送船が沈没して亡くなっていますが、あの当時としては比較的、家族や親族に被害が少なかったほうだと思います。

——巣鴨プリズンでコックをされていたそうですが、その仕事を見つけたきっかけは何だったのでしょうか。

勤めていた軍需工場は解散になってしまい、焼け野原の東京では他に仕事ありません。そこでしばらく、日雇いで働いていました。仮住



巣鴨プリズンでコックをしていた頃の広瀬さんと同僚

まいをしていた豊島区の椎名町から池袋へ出て、広場で待っていると進駐軍のトラックが人を集めて来るのです。それで公共の建物のトイレ掃除や、がれきの片付けなどをして日銭をかせぎました。

職業紹介所にも行ったけれど、以前のような機械を扱う仕事はまったくない。しょうがなく、「進駐軍の仕事でもいいからお願ひします」と頼んで、紹介されたのが巣鴨プリズンだったというわけです。

——料理は得意だったのですか？

いいえ、まったくできません（笑）。ですから最初はヘルパーで入って、掃除から始まり、1年後にコックに昇格したのです。職場にはコックとヘルパーが10数人いたでしょうか。

巣鴨プリズンはもともと巣鴨拘置所でしたから、建物は古くて汚く、設備も貧弱でした。キッチンには直径1メートルほどの蒸気釜が6台備え付けられており、それで700人ぐらい居たA級・B級・C級戦犯たちのご飯やおかずも全部作っていました。

食材は進駐軍が明治屋を通じて買い入れていましたから、けっこういいものが使われていましたよ。アメリカ本土からも、進駐軍の大量の食材が運ばれてきました。施設の外では多くの人々が、田舎へ買い出しに行ったり、闇市でなんとか食料を手に入れようと苦労をしていた時代でしたから、非常に複雑な気持ちではありましたがね。とはいえ厨房で働く私たちは、3食食べ



メリケン粉の入っていた袋で作った洋服

ていました。余った食材は自宅へ持って帰ることができました。

——それは、ご家族にも喜ばれたでしょう。

ええ、「おかげで買い出しに行かずにすむ」と感謝されました。あと、たとえばメリケン粉（小麦粉）の入っていた袋。アメリカ製の粉袋は丈夫ないい生地できていますので、洋服屋に持って行って洋服に仕立ててもらえます。たとえば袋6枚で背広が1着できるなら、倍の12枚を持って行って、残り6枚を「工賃だ」と言って渡すわけです。

巣鴨プリズン

第二次世界大戦敗戦後、豊島区西巣鴨（現・豊島区東池袋）にあった東京拘置所を連合軍が接收し、戦争犯罪人として逮捕された日本人政治家・軍人を収容した施設。極東国際軍事裁判により死刑判決を受けた、東条英機をはじめとするA級戦犯7名の処刑が執行された。現在、跡地にはサンシャインシティが建っている。

——お金がいらぬんですね。

インフレでお金の価値も下がっていましたがから、物々交換がけっこう普通に行われていたのですよ。

——珍しい食べ物にも出会いましたか。

生ハムですね。生まれて初めて食べて、あれはうまかったなあ(笑)。進駐軍が食材として使った余りの骨の骨だけコックにくれるんですよ。まだかなり肉が付いていたから、みんな食べました。

チーズもオランダとかフランスとか、北欧のチーズもうまかったねえ。ただイタリヤ産の料理用チーズは、たまに見たら中にウジ虫が入っているんですよ。「腐ってるから捨てちゃえ」と騒いでいたら、「何言ってるんだ。これがうまいんだ」って。

——食文化の違いですね。

逆に当時のアメリカの軍人さんは、魚を生で食べたことがない。せっかくのおいしそうな刺身を「煮て出せ」というんだから。これは煮たら意味がないんですよ、ワサビとしょうゆを付けるとうまいんですよと目の前で食べて見せるんだけど、「大丈夫か、明日も仕事に出て来られるか」と心配されてねえ(笑)。

東条英機のサンマを焼く

——コックの仕事としては、どんなことが印象に残っていますか。

A級戦犯として収容されていた、東条英機の最後の食事です。死刑の前に何か望みはあるかと聞かれて、「サンマの焼いたのが食べたい」と答えたそうなのです。しかし厨房には蒸気釜しかなく、焼き物ができませんでした。そこで

ずいぶんと考えて、熱々に熱した釜にバターを溶かして、焼いて出した覚えがあります。

最後の食事に希望が言えるのは、A級戦犯だけです。しかし私たちコックは、B級・C級戦犯の人が処刑される日も分かりました。それは教誨師といって、死刑囚に引導を渡すお坊さんの食事を「明日の昼は用意するように」と言われるからです。

巣鴨プリズンには5台の絞首台がありました。サンシャイン近くの東池袋中央公園には、絞首台があった場所に石碑が建っていますよ。

——仕事以外で、何か記憶に残っていることはあるでしょうか。

巣鴨プリズンの4階にホールがあって、土曜日になると進駐軍と職員向けに映画が上映されました。私たち職員も仕事が終わってれば、後ろに立って観ることができた。セリフは英語だから分からないけれど、画面を見ればだいたいは筋は分かりました。

アメリカ軍の写した本編の前にはニュース映画もあって、私はそこで沖繩戦の映像を初めて見たのです。これはもう、すさまじかったですよ。アメリカ軍の軍艦が沖繩の島を三重、四重にも取り囲み、ロケット砲で集中的に砲撃する

A級戦犯

極東国際軍事裁判所(東京裁判)において、憲章第6条A項が規定する「平和に対する罪」に違反し有罪判決を受けた戦争犯罪者。「平和に対する罪」とは、国際法で不法に戦争を起す行為のことを指す。なお、憲章第6条B項「通例の戦争犯罪」、C項「人道に対する罪」により定める戦争犯罪者をそれぞれB級戦犯、C級戦犯という。

東条英機

明治17年7月30日(台籍上は12月30日)生まれ。日本の陸軍軍人・政治家、第40代内閣総理大臣。太平洋戦争において陸軍大臣と参謀総長を兼任した。敗戦後に拳銃自殺を試みるが失敗し、極東国際軍事裁判所(東京裁判)で開戦の罪(A級・殺人の罪(B・C級))として起訴され、判決後、昭和23年12月23日、巣鴨プリズンで絞首刑が執行された。



様子が空撮されている。アメリカ兵が上陸すると、日本人はみな洞窟に逃げ込んで抵抗したんですね。そこを今度は火炎放射器で——あの映像は、本当に恐ろしかったですよ——まず油脂がばーっと撒かれて、そこに火がつけられる。中では全員が焼け死んだでしょう。

投降を呼びかける映像もあって、ボロボロの白シャツを棒に巻き付けた兵隊がおっかなびつくり洞窟から出て来る。その後からぞろぞろ続いた日本人の姿が、悲しいくらいみすばらしくてね。

——同じ日本人として、見ているのがつらかったですし。

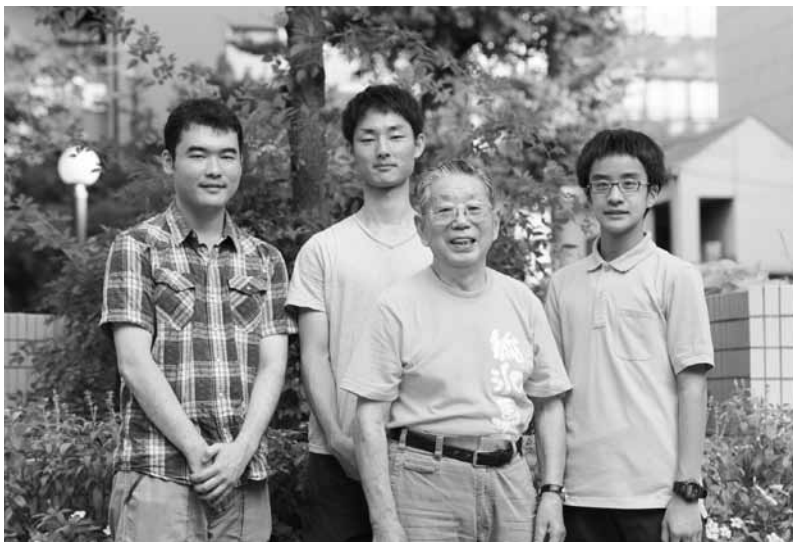
私がいちばん目を覆いたくなったのは、ひめゆり隊の記録でした。自分とたいして年の違わない沖繩の娘さんたちが、もんぺ姿で崖から次々と飛び降りて亡くなっていくんですから。あんな映像は、日本ではまったく知られていなかった。アメリカのニュースだから観られたんです。

——戦前から戦後にかけての、こうした貴重な経験を通じて、広瀬さんが若い世代に伝えたいことがあれば、最後にお聞かせいただけますか。

いろいろな論議はあると思いますが、戦争はもう絶対にしてはいけない。国と国との争いも、できるだけ話し合いで、お互いの妥協点を見つけていくことが大切でしょう。

今の若い人たちは、「命は何よりも大事なものと教えられて育っています。私たちが「お

国のために命など惜しくはない」と教え込まれていた時代とは、考え方がまったく違います。そんな日本が、いまさらよその国民と戦えるとは思えません。それでいいのだ、このままの平和な国を守ってほしいと心から願っています。



写真左から、松野さん、伊達さん、広瀬さん、三輪田さん